

なぜそう思ったのかと言うと、彼らと暮らしていると視覚だけではなく、音を聴くことや匂いを嗅ぐこと、あるいは草原を渡ってくる風の感触を肌で感じるなど、あらゆる感覚的な事象に彼らが密着した生活を送っていることを知ったためだ。それにより遊牧民の人々は、感じることに私よりはるかに卓越した能力を身につけているのではないか。そして彼らは世界を理解するのではなく、世界というものをじかに感じているにちがいない。

これは一般的には身体論とか感覚論というレベルで扱われる問題かも知れないが、そうではなく、私にはもっと総合的な人間論、世界観の問題に思えてならない。なぜなら、この底にあるのは単なる能力論ではなく、それをどう生かしているかという、実際的な人々の暮らし方の問題に思えるからだ。

教育は楽しく生きるための知恵探し

教育とは、人々が地球上の生きとし生けるものと共に楽しく有意義に生きるための知恵探しだ。

今日、高度に発展した経済社会の大義名分は様々あるだろう。しかし、それが誰のためのものであるのか、今ひとたび、きっちり考え直す必要がある。大震災の只中で子どもたちを

身近かで見るとつけ、改めて「このままではいけない」と強く感じた。ここでちょっと立ち止まって深呼吸をしよう！

日本は社会の高度化と都市の緻密化が極度に進展している。だが、それが子どもにとって生きやすい場所かという、必ずしもそうではなかった。私たちの原点である家族の暮らしが見えにくくなっていった。それは孤立した都市の中では「共に生きる」という感覚が希薄になってしまうためではないのか。

子どもたちは人々と「共に生きる」ことにより、「豊かな体験」をし、地域社会との結びつきを実感し、「他者の役に立つ喜び」を知り、「奉仕する役割」を身につける。そして、このサイクルは次の世代へと受け継がれていく。家族を基盤とした地域社会は、このようなすぐれた循環機能を持っていた。

いかに世の中が変容しようとも、この原点を見失ってはいけない。一生涯たくましく思いやりを持って共に生きていく力を身につけさせてやりたい。高邁な教育論などは不必要。ひたすら裸で子どもたちとぶつかり合っていけばいい。地震、津波、原発事故という「三重未曾有」の被災地の只中で、私は強く強くその思いを感じている。

今、隣の教室からは、緊急預かりの子どもたちの声が聞こえてくる。ああ、元気な声だ。

(くらもと のぶゆき)



田んぼの脇を通っていた国道には電柱が一本もなくなっている。

PHOTO: 天形 健